

【論文】

## 本学人間福祉学科保育士資格必修科目「保育内容総論」授業の現状と課題

広島文教女子大学 人間科学部 初等教育学科 講師  
上村 加奈

### はじめに

質の高い保育士の養成は、保育士養成校の教職員に課せられた社会的な責任である。教員としては、質の高い授業を行うことによってこの社会的な責任を果たすことが必要になる。教員が行っている授業がどのような質のものであるかは、授業実践を報告することを通して明らかにすることが必要になる。筆者はすでに、その試みを報告してきた<sup>1)</sup>。

本論文では、2012年度の「保育課程論」・「保育内容総論」の授業実践を踏まえ、本2013年度に行った両科目の授業を振り返るなかで、特に「保育内容総論」の授業に視点をあてて、学生の授業記録・レポート・学生の学びの様子等を分析・考察し、保育者養成教育における「保育内容総論」授業の現状と課題を明らかにする。

「保育内容総論」の授業は、「保育課程論」の授業の上に展開されるからである。

### 1. 本学における保育士養成教育

全国的にも稀有な例であると、筆者は認識しているが、本学では、人間福祉学科と初等教育学科の二学科で保育士養成を行っている。両学科の学生は、保育実習の事前指導・事後指導（2年後期から3年後期）のほか、保育原理（2年前期）・保育者論（2年後期）・社会的養護（2年後期）の授業については合同の授業を受講している。これらは2年次時点でのことであり、3年次以降も他の科目で合同の授業を受講している。

合同の授業を担当するなかで教員はそれぞれの学科の特性が学生の学修の状態に反映していることを実感できている。お互いに学びあう学修環境があることは双方の学生にとっても意味のあることである。担当教員としては、こうした利点を最大限生かすことが必要になる。筆者はそれを意識して授業を実施してきた。

厚生労働省の通達により、2010年に保育士養成教育課程が改正され、2011年度入学生から実施されている。改正に伴い新設された科目のなかに、上記の必修科目として「保育課程論」と「保育内容総論」がある。人間福祉学科の学生を対象にこの二科目を筆

者が担当することとなった。開講時期は、2年前期に「保育課程論」、後期に「保育内容総論」となっている。二つの授業を構想するにあたって、「保育課程論」の学びを連動させて「保育内容総論」の授業を展開することとした。

### 2. 人間福祉学科の学生の実態

本学科の学生は社会福祉士の受験資格取得に取り組み、さらに保育士資格取得を目指す学生が半数程度いる。福祉学の理解と福祉職の基本及び基本姿勢についての理解をベースに学びを深めていくことが期待されている。3年前・後期に1回ずつ社会福祉施設での実習も計画されているため、その方面での学びの機会は多くある。しかし、児童福祉施設、なかでも保育所についての学びの機会は多くはない。特に模擬保育実践について、学生自身の知的好奇心と学ぶ意欲は高いものの、学修機会の少なさから未知の体験に対する不安を感じ、保育実践を難しいと捉えている学生が多い。

学生自身の保育所体験は半数程度の学生が持っている。しかし、幼少期の保育所体験の掘り起こしは、大学で保育原理の授業を契機に始める場合がほとんどであり、保育所時代の体験については、遊び体験の記憶が中心である。また、中学校や高校時代に職場体験学習で保育所の実際に触れた学生にとっては、幼児と一緒に遊んだ経験はあるものの、保育を総合的なものとして捉えていたという感覚はそれほど意識していたわけではないのが実情である。

こうした学生の実態に鑑み、授業形態と授業展開を考えることが授業担当者にとっての最初の課題となる。保育の専門家として理論に裏打ちされた実践力は必須であり、保育は総合的な理解が重要である。そのために講義で理論を知り、演習で具体的な実践理解を得、実習において現場で対応する専門性に触れる。実習体験を振り返り、理論と結びつけて考えるという段階的な学修が必要である。厚生労働省の保育士養成教育課程に規定された授業を実際の学生に当てはめるのではなく、実際の学生の実態に即して規定された授業内容をいかに教授していくかが問題になると思われる。

### 3. 「保育課程論」の授業概要

#### (1) 授業構想の意図

前述したように、本学では二学科で保育士養成を行っている。学科の人材育成目標を踏まえ、学科の特色を生かして各学科の教育課程が定められている。「保育課程論」は、人間福祉学科では前期開講、初等教育学科では後期開講となっている。初等教育学科では、保育原理と幼児教育課程論を履修したのちに「保育課程論」を履修する。

筆者は、授業担当開始年度に、筆者自身の指導力向上と学生の既存の知識把握を目的に、幼児教育課程論の授業を聴講した。保育原理の授業については、3年次開講の担当科目乳児保育の授業において、知識の習得状況は把握していた筆者が、本論文執筆にあたり、保育原理の授業も聴講しておく必要があった。

人間福祉学科の学生は、幼稚園教諭免許を取得しないため、幼児教育課程論は開講されない。さらに保育原理と同時期開講ということに鑑み、授業を組み立てた。他の専門科目と重要項目は重複することも踏まえながら、保育の基本原則の学修と並行して保育課程論を展開していく工夫が求められる。保育者論に関しては、開設された2012年度の授業を聴講し、保育内容総論の授業に活かす努力をした。

#### (2) 授業の目的・概要

本学規定のシラバスに、本授業の目的および概要を次のように設定した(一部修正補足)。

本講義では、保育所における「保育の計画と及び評価」について学修することにより、保育所保育を理解することを目的としている。

保育所における保育は、保育所保育指針に沿って行われる。平成20年改定の保育所保育指針は、7章からなる。その第4章に保育の計画及び評価について示されている。従来、保育計画としていたものを保育課程と改め、その位置づけも明記されている。保育所における保育実践の力を養成するためには、「保育の計画及び評価」の理解は欠かせない。そのため、『保育所保育指針解説書』を使って授業を進めている。

本講義は、保育所保育の理解・子ども理解・保育内容理解ののち保育の計画及び評価について学修する。保育課程並びに指導計画の実際を把握し、保育課程並びに指導計画と評価・記録の関連を理解する。

また、子どもの発達に沿って、各年齢の指導計画について理解する。さらに、指導案の構造と書き方の学びをもとに、グループで協議しながら指導案を立案することにより、指導案について理解する。

保育を計画することに対して消極論や不要論もあ

る。しかし、子どもの発達の特徴を捉えながら、子どもの興味や要求を大切にした保育を実践するためには保育を計画することが必要である。このことは、保育実践の長い歴史の中で何度も確かめられてきたことである<sup>2)</sup>。

#### (3) 授業の到達目標

本授業を受けることにより、学生に次のような力がつくことを目指している。

- 1) 保育の計画と評価の全体像を理解することができる。
- 2) 保育課程の編成と指導計画について具体的に理解することができる。
- 3) 保育指導案について理解し、立案することが出来るようになる。

#### (4) 授業計画

前述の目的に沿って、表1のように授業を展開している。

表1 保育課程論の授業計画

1. 保育所の役割と保育の基本
2. 子どもの発達と保育 0歳児
3. 子どもの発達と保育 1歳児
4. 子どもの発達と保育 2歳児
5. 子どもの発達と保育 3歳児
6. 子どもの発達と保育 4歳児
7. 子どもの発達と保育 5歳児
8. 保育の計画と評価
9. 保育課程の編成
10. 保育課程と指導計画
11. 指導計画と記録・評価
12. 保育指導案
13. 保育指導案の立案1
14. 保育指導案の立案2
15. まとめ

保育における保育の計画の意義と計画の実際を理解した上で、活用し実践する力を養成するために、保育指導案を立案することを学生に課している。本学科の学生は、保育指導案を書く機会が少ないという現状に鑑み、保育の計画の全体像を理解したうえで、4～5人で構成される6つのグループで協議しながら保育指導案を立案するという授業展開にしている。事前事後学修の取り組みで、個々の学生が考えたものを持ち寄り、グループで検討することにより保育指導案の質を上げていくことを目指したからである。保育士に求められる資質能力として省察性・同僚性・協働性を育むためでもある。

本授業で作成した保育指導案を用いて、後期履修

の「保育内容総論」を展開していくことを計画した。

#### 4. 「保育内容総論」の授業の概要

##### (1) 授業構想の意図

本来、保育は養護と教育が一体的に展開されるものである。したがって、保育内容も子どもの発達を踏まえ、総合的に展開されることが望まれる。保育の実践者である保育士には、保育内容を総論として捉える力が求められる<sup>3)</sup>。小学校以上の学校教育で、各教科に分かれた学習を体験してきた学生にとって、保育の内容を総合的に捉えることの重要性を理解することが、保育者養成教育の大切な点になる。

全国保育士養成協議会が示す「保育内容総論」の教授内容を基に学生の実態を考慮し、授業の到達目標達成に向けて、模擬保育実践の経験を通して体験的に学修する形態とした。

前述の学生の実態を踏まえ、模擬保育実践により保育を総合的に捉える必要性を実感として理解できることを重視したために、保育内容の歴史の変遷の学びと長時間の保育並びに多文化共生の保育については取り上げることが出来ていない。ただし、この内容について、保育原理・保育者論等の授業では取り上げられていることは確認している。

##### (2) 授業の目的・概要

本学規定のシラバスに、本授業の目的および概要を次のように設定した（一部修正補足）。

子どもの生涯発達にとって、乳幼児期に質の良い遊び体験が保障されるか否かは重要なことである。子どもの健全な育ちを保障する立場にある保育士には、遊びの知識とそれを実践する保育技術を備えておくことが必要になる。

そこで、本講義では、保育の領域を総論的に捉えるために、遊び研究を行う。保育は遊び体験を通して子どもの心身の発達を促す営みだからである。学生が考えて立案した遊びを模擬保育実践することを通して、実感として保育を総論的に捉えられるようになることを目的としている。

前期の保育課程論の授業の中で発達過程を踏まえた子どもの発達の姿、それに応じた保育士の援助の内容と方法についての概論とその実際についての理解については、一定の学修がなされている。こうした土台を踏まえての本授業の位置づけである。

そこで、学びのプロセスを次のように考えている。子どもの遊びを取り上げ、立案した保育指導案をもとに幼児と保育者役になって模擬保育実践を行う。模擬保育実践を振り返り、研究協議を通して、子どもにとって遊びの持つ意味や遊びを楽しめるようにするた

めの展開の仕方や留意点を理解する。さらに、子どもが楽しく活動するための援助として、保育技術を体験的に学ぶ。そして、養護と教育が一体的に展開することを具体的な保育実践につなげて理解することを目指している。

##### (3) 授業計画

前述の目的に沿って、表2のように授業を展開している。

表2 保育内容総論 授業計画

1. 保育内容総論の捉え方
2. 保育指導案の検討
3. 模擬保育実践1-1(運動遊び)・省察
4. 模擬保育実践1-2(運動遊び)・省察
5. 模擬保育実践2-1(ルールのある遊び)・省察
6. 模擬保育実践2-2(ルールのある遊び)・省察
7. 模擬保育実践3-1(自然物を使った遊び)・省察
8. 模擬保育実践3-2(自然物を使った遊び)・省察
9. 模擬保育実践4-1(製作)・省察
10. 模擬保育実践4-2(製作)・省察
11. 模擬保育実践5-1(粘土遊び)・省察
12. 模擬保育実践5-2(粘土遊び)・省察
13. 模擬保育実践6-1(折り紙遊び)・省察
14. 模擬保育実践6-2(折り紙遊び)・省察
15. まとめ

初回で、本授業で目指すものを含めたガイダンスと、領域の捉え方について概説する。その後は、実践を主軸に据えた授業展開とし、体験を通して学ぶという形式をとる。その理由は、保育実習を経験していない学生が、保育の実際を理解するためには、理想論や空論ではなく、具体的に保育内容や環境構成および援助方法を考えて、実感を伴った形で理解を深める必要があると考えるからである。

##### (3) 到達目標

本授業の到達目標を次のように定めている。

- 1) 保育の内容を総論として捉える意義を理解する。
- 2) 「子どもの実態」、「保育のねらい」、「保育の内容」を関連付けて遊びの展開を考えることができるようになる。
- 3) 遊びの体験から、保育内容を考察することができるようになる。
- 4) 学びをまとめることができるようになる。

##### (4) 授業内容

授業内容の詳細は次のとおりである。

- 1) 保育内容総論の捉え方  
保育における領域は、子どもの発達の諸側面を表

しており、遊びと生活の経験によりその発達が促される。ひとつの遊びには、いくつもの領域の保育内容が盛り込まれており、保育は総合的に実践されるため、総論としてとらえる必要があるという内容を教授している。

## 2) 保育実践

前期の保育課程論において、五領域の偏りがないように6つの主活動を抽出し、各グループで立案した40分程度の保育指導案を基に模擬保育実践を行う。立案グループが保育者となり、他の5グループが子ども役になって、模擬保育室において保育をする。

今年度の履修者数は28名であった。保育者役をする学生も、保育者役をしない場面では子ども役を担い順次保育者役をするという形態としたため、27名を対象にした保育場面を想定した。保育所の4・5歳児の保育者と子どもの比率が1:30のため、保育現場を想定すれば27名が子ども役というのは理想的な人数と言える。しかし、全員が1度は保育者役を経験するためには、1人の保育者役場面が少なくなるという課題はあった。

その点は、本授業は実習の事前指導ではないので経験を保障することに留めて授業形態を設定した。履修学生は模擬保育の経験がないことを踏まえ、模擬保育実践を振り返り、省察し、改善することにより、実践の質があがるという体験をして欲しいと思い、1つの遊びにつき2コマ分の時間をとった。

1コマ目に保育指導案の前半部分を30分間実施し、模擬保育実践の後、10分間で作成した振り返りレポートをもとに全体で40分間、研究協議する。研究協議においては、良かった点と、改善点を洗い出し、遊びを楽しむために必要な知識と技術についてまとめる。2コマ目は前講の反省を基に保育指導案を改善し、修正後の保育指導案の後半部分を同様の形式で学修するという授業展開とした。

事前学修として、保育実践の準備として教材・教具の準備および模擬保育実践のシュミレーションを課した。

事後学修としては、1回目は改善案の検討、2回目は改定指導案の作成を課した。

## 3) まとめ

最終講となる15回目は、指導案・振り返りレポート・改定指導案を基に、「子どもの実態」「ねらい」「保育内容」の関連を考える。遊びの本質・子どもが楽しむための配慮事項などを考える。

## 5. 分析・考察

学生の学びの実態を知るために、次の5点を用いる。

- ①学生が記入する授業記録、②模擬保育実践振り返りレポート、③改定指導案、④まとめのレポート、⑤授業中の様子である。

資料分析の結果、授業の実態と成果について4点にまとめた。

### (1) 子どもの実態、保育のねらい、保育内容の関連を理解する

#### 1) 子どもの実態を描く

本授業を受講する時点ではまだ実習体験がないので、学生が作成する指導案の子どもの実態については、既存の知識と資料に基づく仮想の子どもでもある。

学生が想定する仮想の子ども像についての既存の知識としては、保育原理・保育者論・保育課程論での学びを活用することとなる。

資料としては、保育所保育指針で発達をつかみ、文献および保育雑誌の月の指導計画を活用して設定した。

授業時の配付資料は、保育課程2種類と年間指導計画6種類、月の指導計画7種類である。年齢や時期を考慮して幅広く紹介した。その他参考になる保育雑誌を紹介した。

設定時点では、専門的な視点をもって子どもと接した経験がないために子どもの姿を描けず、大まかな発達の特徴を示すに留まり、具体性に欠けていた。また、クラスの集団活動の様子や過去の経験などの必要な情報が漏れていることを授業の中で指摘するが、学生には理解が難しい様子であった。実習体験を欠いていることが大きな理由であると思われる。

各模擬保育実践とも1回目の振り返りのなかで、授業者の指摘により、学生は自分たちの子どもの実態に関する記載内容が不足していることに気づいた。しかし、その時点での気づきは、前述の必要な項目が分かる程度で漠然としたものであった。

最終講のまとめの授業で、1次案と改定指導案を比べることにより、必要な情報を知るとともに、子どもの実態を把握する視点を理解した。

#### 2) 子どもの実態、保育のねらい、保育内容のつながり

模擬保育実践→省察→改定指導案作成のサイクルを繰り返す、最終講のまとめで、自ら行った実践をグループ毎に関連を見つけてグループワークを行った。

すべてのグループが具体的に関連の実態をつかみ、実態を踏まえて対象の子どもにとって価値ある活動として保育のねらいを設定し、ねらいに沿った保育内容を意図的に考えることを理解していた。

### 3) 遊びを通した総合的な子どもの育ち

各回の研究協議のなかでは、ねらいが適切であったかどうか、達成状況はどうであったかなどを確認した。さらに、子どもが経験したことと育ちとの関連を掘り下げて考え、学生同士で意見交流する中で、五つの領域に比重の差はあるものの、すべての領域にわたって発達が見込まれることに気づいていった。

## (2) 保育内容を考察する力

保育内容総論の授業を終えて、授業者として学生の学びを振り返ると、2年生になった頃の学生は、保育は理論での理解であったように感じている。授業記録を見ると、知識を得る喜びはあるものの、保育中の子どもや保育者をイメージすることが難しく、具体化されていないことがうかがわれる。

前期の保育課程論で指導案を作成時の机間指導で、指導案の形式に則り、出来得限りの知識をもとに考えている様子はどうかがわかれた。しかし、授業感想記録を見ると、保育を実際のものとして捉えるイメージが十分ではないという記述であった。

このような前期の学生の感想を受けて、後期の保育内容総論の授業で模擬保育実践を行うことにより、子どもの心情を擬似体験し、保育者側の視点に立って考えることで、子どもが楽しむために必要な要素を理解していった。それは、授業時の発言からもうかがわれたが、模擬保育実践の振り返りレポートの記述内容が、絞り込んだ具体的な気づきと学びになっていったことから分かる。

また、模擬保育実践後に第1次指導案に朱書きする形で改定指導案の取り組みを課した。学生により記載内容に差は見られるが、授業時の協議内容を反映させて適切に改善されていた。なかには、さらに独創的に工夫を加えたものもあった。模擬保育実践振り返りレポートとの関連を見ると、模擬保育実践振り返りレポートで、教材研究や環境構成、保育者の援助の問題点や改善の手立てが記され、改定指導案に活かしているものもあり、模擬保育実践を考察する力の育ちが見てとれた。

## (3) 遊びの発展の理解

子どもにとって遊びとは本来、楽しく自由で目的的であり、自発的なものである。近年、幼少期からの創造的な遊び体験の不足から、遊びの本質理解を促すことに難しさを感じている。

この点に関して、初等教育学科の学生は、本人たちの意識しないところで、保育者主導でいわゆるお膳立てをして遊びを進めようとする。保育者として子どもに対して何かしなければならぬと考えるようである。学生には、保育における援助の理解が難しい。

そこを崩して遊びの本質を踏まえた取り組みを再構築することに授業者としては苦心している。

他方、人間福祉学科の学生は、支援者の実態に応じて援助していくという福祉についての基本姿勢が備わっており、遊びの援助を理解しやすいようであると筆者は感じている。

しかし、両学科の学生とも遊びこむという体験が不足していることは否めない。本授業においても、学生が子ども役として保育に参加し、遊びが発展する楽しさを実感出来たのは、最終段階となる模擬保育実践6であった。授業者が、子どもの行動をどう読み取ったかと投げかけ、遊びの発展であると読み取ったことを伝えてからであった。その実践において、2人の子ども役の子が新たな遊びを思いついて遊び始めたものの、保育者役の学生はそれを取り上げなかった。

実践後の振り返りでそのことを確認すると、予想外の子どもの動きに戸惑い、みんなと違うことをする子どもを発想力のある子どもと肯定的に捉えられていなかったと保育者役の学生は述べた。一方、子ども役の学生にその時の心情を聞くと、遊びを思いつき、ワクワクして楽しいという感情であった、しかし、それを取り上げられなかったことは、心残りであったと話した。

そこで、筆者は遊びが展開した時点から模擬保育を再開することを提案した。実際に遊んでみることで、学生は遊びが発展することの楽しさと、遊びが伝わり広がっていく共振の喜びを実感した。そこから、保育者として、子どもの気づきや発見を取り入れて保育を展開することが、子どもの心情・意欲・態度に影響することを理解した。

ここで課題となるのが、模擬保育実践6になるまで遊びこむ体験を授業者として提供できなかった点である。模擬保育実践5までのところでは、演じる子ども像にダイナミックさや独創性が乏しく、遊び込むまでに至らなかった。遊びこむための、授業者の指摘のポイントが絞りきれていなかったため、学生が理解しにくかったことと、最終回までに取り上げたいというねらいで授業を展開していたことが要因である。授業者としての筆者に、学生の様子に沿って課題を的確に指摘し、改善策を考えられる示唆をする力と、学生の力量を押し量りながら、期待できる育ちを見極めてその都度的確に対応する指導力の向上が求められる。

## (4) 省察の重要性と改善策発案による動機付け

保育において質の向上を目指すには、PDCAサイクルの取り組みが必要である。模擬保育実践を振り返り、課題を明確にし、改善の手立てを模索する力が求められる。保育にマニュアルはなく、保育者の判断により個別具体的に対応することの積み重ねであ

る。そうであるからこそ、保育者自身が成長を確認し、答えのない問いを繰り返す専門性が必要となる。

本授業では、徹底的に省察・課題発見・改善案の検討を行った。学生の授業記録及びレポート記載内容から学生の内実と課題が見えてきた。

- ①人の前に立つ経験の不足を実感し、保育実践をすることで見えた自身の力量を受け入れることに葛藤している。
- ②実践後の協議で、指摘を受けることに戸惑いを感じている。
- ③改善案を考え実践につなげることで、成長の喜びを感じる嬉しさを実感している。
- ④課題解決は次の課題発見の入り口であると理解し、成長するためには、次々と課題に取り組まなければいけないと感じている。

本授業では、6グループが1回ずつ、全6回の模擬保育実践を行った。実践者は交代していくが学びの連続性があった。学生により取り組み方に差はあるものの、受講学生全員が、次回以降の実践に前回までの学びを活かす姿勢を堅持していた。その表れとして、本授業は2コマ目開講科目であったが、実践グループは自発的に1コマ目に集合し、個々が考えてきた改善案を練り、模擬保育準備を行うという姿が見られた。貪欲に学ぶ姿勢と、保育実践の力を着けたという意欲が感じられた。思うようにいかないことに対しても、グループ内で支えあい、一段階ずつ成長する喜びを感じていた。これは、将来保育者となるために身に付けておきたい重要な事項である。

保育内容の指摘についても、保育者に視点をおいたものから、子どもの気持ちに配慮した視点での発言が見られるようになり、授業記録も学びの内容を具体的に記述するようになった。模擬保育実践3では、それぞれの遊びの特性を理解し、模擬保育実践4では、遊びを楽しむための教材研究の重要性を理解した。

#### (5) 協働性の育ち

本授業ではグループ活動を取り入れたので、友達と協力し連携しながら動く機会が多かった。学生の最終レポートから、グループ内で意見が対立し、一触即発の状態になったことがあったとのことである。最終レポートで得た情報であったため、詳細な内容は把握できず、指導には至らなかった。困難な状況を乗り越えることで、真剣に意見交流することや、関係改善を含めた問題解決の経験が成長につながっていったことも分かった。

模擬保育実践においても、実践後の協議においても、最初は遠慮して自分を表現しにくい様子の学生が多かった。経験による変化も期待しながら、保育

場面で子どもになりきっている学生の言動を取り上げたり、研究協議場面で考えて発言したこと、気づきの視点、意見の内容を具体的に認めたりするなどの働きかけを行った。回を重ねるにつれ、恥ずかしさを捨て、考えながら子ども役に徹しようとする学生の姿が見られはじめた。研究協議の場面でも、遠慮がちであった姿から、ポイントを絞った的確な意見が出てくるようになり、集団として高めあう雰囲気を作られていった。

## 6. 今後の課題

### (1) 授業者の課題

子どもに対する保育は、遊びや生活経験を通して行われる。前述したように学生を見ていると、遊びや生活体験が不足していると考えられる。体験が不足している学生に対しては、体験的な学修が効果的である。目指す保育士の仕事は実践が主である。理解の度合いも「知る」から「識る」へ、そして行動レベルの理解へと導く必要がある。学生が活動する比重が高くなると、学ぶ材料が多様に提供される。その際、事実を基にした教材を大切にしながら、授業者がねらいを明確にし、ずれがないようにしなくてはならない。そして、学生の実態を把握しながら、一方的な教授ではなく学生が思考し、納得するような理解を目指す授業を展開していく力量が必要となる。今年度の本授業では、この点が不十分であったと、履修学生から教えられた。

また、担当授業科目の位置づけや他の授業との関連性を理解することは、保育士科目を担当する者としては必須である。関連授業の内容にも関心を持ち、協働し内容の精査と資質向上の取り組みをする必要がある。本論文をまとめるにあたり、保育士科目担当教員と振り返りをしたことによる気づきは大きかったと実感している<sup>4)</sup>。

### (2) 学生の課題

本論文で取り上げた授業実践を通して、学生の学ぶ意欲と主体的な取り組み姿勢を実感した。一定の学びを確認することも出来た。しかし、保育現場で求められる保育士の専門性は高くなる一方である。養成段階における教育効果を高めようとするならば、学びを確認する経験が大切である。

その点で言えば、初等教育学科は2年次夏季休業中に教育課程である幼稚園の観察実習を経験する。実習経験により、保育の実際をイメージしやすくなるという育ちが見られる。

人間福祉学科の学生も、同様の時期に自主的な保育所見学及びボランティアを経験することで、さらな

る学びの深まりを期待できるのではないだろうか。保育現場の状況を考えると1～2日の期間であろうが「百聞は一見にしかず」であると考ええる。

子どもの前に立つことに対する不安は、経験回数を重ねることによって軽減することが十分可能である。本授業を契機に、学生が声をかけあって自主的な学びをし、保育の理解と実践力を身につけ、学ぶ喜びを実感して欲しい。

また、今後さらに学びを深めようとするならば、文献を読むということが必要となるであろう。例えば、子どもの実態を描くための資料は提示しておいた。ある程度はそれで把握できたと思うが、関連の文献や保育雑誌を読むことで理解が促される。模擬保育実践に対する意欲と比べ、文献に触れていこうとする意欲は乏しかったように思われる。

この点に取り組むことで、さらなる成長が期待できる。

これは、実習経験後も実践と理論をつなぐ学びとして、取り組むことが望まれる。見方を変えれば、授業者である筆者自身が、学生が文献に触れて学びを深める喜びを味わうための動機づけが十分であったかどうか。授業者としての力量をさらに高めることが必要となる。

### (3) 養成教育課程の課題

保育士養成課程教育の授業科目の配列については、保育課程論は、保育の基本を学ぶ保育原理履修後が望ましい。それは、両学科の学生を見たときに、保育原理履修後に保育課程論を学ぶ初等教育学科の学生の方が、授業間の関連や他の授業の学びを活用するということが、容易に出来ているからである。

保育課程論と保育内容総論について、他の養成校の教員と協議・検討した際に、二つの科目どちらかを下級学年に配置し、他方を上級学年に配置していた。その意図は、二つの科目を関連させ、理論を重点的に教授し実践につなげた理解に導くようにするためである。科目の順序は様々であった。保育課程論は講義であり保育内容総論は演習科目である。保育課程論は保育所保育の根幹を成す計画に関する学びであり、保育内容総論は保育の基本を踏まえ個別具体的な保育実践を考える要素があることに鑑みると、保育課程論履修の後、保育内容総論を履修することが望ましいと考える。

小川博久氏の論考は貴重な指針となる。専門的実践的な保育者養成論に基づく検討が必要不可欠である<sup>5)</sup>。

### おわりに

筆者にとって、保育課程論と保育内容総論の授業を担当することは喜びであった。それは毎回の授業で、前向きな学生の姿勢と真剣な取り組みの姿に触れることが出来たからである。彼女らの過去の経験からすれば、自身を他者の前にさらし問題解決に向かうことは、痛みを伴うことであったであろう。しかし、そこを超えて前進する取り組みを養成教育の段階でしたことは、将来につながる貴重な体験であると考ええる。

学生の取り組み姿勢に支えられての授業展開であったが、この経験から、保育の知識や技術の学修に留まることなく、保育者としての資質能力向上、ひいては人間性の育ちを支える一助となるような授業が出来る指導力を、筆者自身に付けることが課題である。

筆者が担当してきた「保育内容総論」は、次年度(2014)から別の専任教員が担当し、筆者は、新たに別の科目を担当することとなった。

両科目の授業を担当する中で見えてきた学生の実態を踏まえた保育実践力を育成することにつながる授業内容と方法を模索し、授業で実践していくことが課題となる。

今後も、保育者の基本的資質能力である省察性・同僚性・協働性を学生が身につけることが出来る授業を追及していきたい<sup>6)</sup>。

### 註・参考文献

- 1) 上村加奈(2013)「本学初等教育学科教職科目「教育実習Ⅶ・幼稚園」事前指導の女子と課題」『広島文教女子大学教職センター年報』創刊号所収
- 2) 保育計画研究会(2004)『保育計画のつくり方・いかし方』ひとなる書房
- 3) 民秋言・狐塚和江・佐藤直之(2009)『保育内容総論』北大路書房
- 4) 徳本達夫(2013)「保育者教育考」(広島文教女子大学人間福祉学会『人間福祉研究』第10・11合併号所収)は、保育士科目をつなぐ授業を目指した試みである。
- 5) 小川博久(2013)『保育者養成論』萌文書林
- 6) 佐伯育郎・徳本達夫(2013)「教育実習指導の現状と課題～教科専門(図画工作)・教職専門(教育史等)の観点から～」(『広島文教女子大学教職センター年報』創刊号所収)は、教育実習での学びと専門教科の学びを結びつける実践を報告している。